



Title	二つの志向性
Author(s)	山田, 徹郎
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1987, 21, p. 5-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4192
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

二つの志向性

山田 徹郎

初めに

『知覚の現象学』においてメルロ＝ポンティは、周知のように、志向性を「作用の志向性」*intentionnalité d'acte* と「機能している志向性」*intentionnalité opérante* とに二分する（cf. PP. XIII¹⁾）。前者が「我々の判断 *jugements* や意志的な態度決定の志向性」（*ibid.*）であるのに対して、後者は「世界や我々の生の、自然的かつ前述定的な *antéprédicative* 統一性を作る志向性」（*ibid.*）、即ちメルロ＝ポンティの語る「知覚」の志向性である。

「私は知覚というものを、判断 *jugement* とか作用 *actes* とか述定 *prédication* とかの秩序に属する総合 *synthèses* とは同一視することは出来ない。」（PP. IV）

ところでこうした区別を、メルロ＝ポンティはフッサールに依るものとして説いているが、フッサールは『経験と判断』の中で、「判断」の原型が前述定的な知覚の水準において存立していること、「知覚判断」とは、前述定的でありながらも、対象化的な作用であることを説く。「知覚」と「判断」とに關する、両者のこうした捉え方のずれは一体何処に起因するのか。そしてこのずれは、両者の「語らなかったもの」を、そして二つの現象学のいかなる差異を物語るものなのか。

第1章 「先所与性」

『経験と判断』においてフッサールは、述定的な言語判断の根拠を知覚経験のうちに求め、前述定的な知覚判断によって一切の判断を基礎づけ、さらには「判断とその形式に関する理論」である形式論理学一般を基礎づけることを試みている。というのもフッサールによれば、知覚経験こそが形式論理学の明証性の限界と権利とを教える最も直接的な経験であり、しかも、知覚判断こそが「判断」なるものの構造の根源的な範例だからである。

「我々が求めるものは、最も基本的なもの、他の一切を基礎づけるものだから、取り上げる判断は最も端的な、最も直接的な経験に基づくものでなければならない。最も端的な経験とは、感性的諸基体の経験、具体的世界全体の内の自然層の経験である。だから我々は、外的知覚、物体知覚にもとづく判断を手掛かりにして、一般に述定判断の構造及び前述定作用との構造的関わりを範例的に研究しなければならない。」(EU. p. 66)

こうしたフッサールの目論見に対しては、当然次のような反論が予想されよう。即ち、述定的判断、わけても形式論理学の説くごとき形式的な命題は、それがもはや知覚判断のごとき個別的で特殊な対象に関わらない点にその形式的な性格はあるのではないか。形式論理学の真理はもはや、判断されるべき対象の性質には関わらず、判断の中で対象が取る論理の形式のみが問題となるのではないのか、と。しかしフッサールによれば純粹に判断の形式にのみ関わり、形式にどのような判断対象、判断基本が挿入されるのかについて無関心である形式論理学は、真理認識の消極的な条件をしか語らない。なぜなら、論理形式を犯す判断は真理でありえないが、この形式上の要求を満たすだけでは真理たりえないからである。形式論理学の語る判断中の名辞“S”や“P”は、任意の対象が代入しうる空虚な場

所として形式化されて考えられているが、実はこの名辞も全く恣意的な置き換えが可能であるわけではなく、暗黙の前提がある。つまり、現実世界（或いは想像世界）の「存在者」*Seiendes* として我々の経験の統一の中で同一性を保つもの、経験の統一の中で「対象的明証性」*gegenständlicher Evidenz* (EU. p. 36) をもって近づきうるもの、という前提がある。形式論理学の語る形式の一般性は、存在者が存在するという一般的事実に基礎づけられている。だからこそ自らははっきりと明言はしないが、形式論理学は「世界存在者の論理学」(EU. p. 37) であり、存在者をかかえる対象的明証性において、即ち「骨肉においてそこに」*leibhaft da*、その充実した端的な現前において与える前述定的な知覚経験に基礎づけられているのである。

ところで知覚判断が全ての判断の範例となりうるのは、知覚判断が直接的な経験であることに加えて、前述定的な知覚判断と述定的な判断との間に、或る構造上の同型性が存するからでもある。「判断という言葉は一般的な本質を意味していて、それは判断の現れる論理行為の全段階で同一の根本構造を示している」(EU. p. 59) のであり、だからこそ最も端的な経験の分析において示される判断の構造は、より高度な判断を洞察する範例となるのである。判断を判断たらしめているもの、述定的であろうと前述定的であろうと、およそ判断が判断として存立するためには、判断されるべきものが先ず「前もって与えられて」*vorgegeben* いなければならない、というのがフッサールの「判断」論の大前提である。例えば述定的判断「SはPである」の場合であれば、「それについて発言されること」(述語P)に先立って、先ず「発言の主題となるもの」(主語S)が前もって与えられていなければならない。しかも前述したように判断が真理認識(＝明証的判断)であるためには、何らかの対象が前もって与えられ、判断作用がそれに目を向けるという形式的な原理を満たすだけでは不十分で

あり、加えて対象そのものが前もって与えられる与えられ方の[・][・][・]内容上の条件がある。即ち判断の基体は、判断の対象となりうるような明証的な仕方、前もって与えられるのである。前述定的な知覚判断の場合も事情は同様であって、一切の知覚判断に先立ち、我々には知覚対象が前もって、しかも根源的な明証性において与えられている。フッサールが「受動的原信憑」*Der passiven Urdoxa* と呼ぶこうした端的な知覚経験において、我々には単なる個々の存在者ばかりではなく、知覚世界全体が「端的な確信」という様態において信憑されている。というのも、知覚経験において存在者が存在者として明証的に与えられるのは、まさに世界内の存在者としてだからである。世界という存在者の総体を背景としてその上に「浮かび上がること」*sich abheben*、それが存在者が存在者として知覚意識に確信をもって与えられるということなのである。

「我々を触発するあらゆる存在者は、世界という基盤の上で触発し、在ると信じられた対象として我々に与えられる。そして認識活動や判断活動は、我々に与えられた当の存在者が本当に存在するか、本当にそのような在り方をしているのかを吟味しようとするものである。存在する世界としての世界は、一切の判断活動、一切の理論関心についての普遍的で受動的な先所与性 *Vorgegebenheit* である。……全体としての世界は、常に既に受動的確信の内に前もって与えられている。」(EU. p. 25—26)

第2章 「受動性」と「受容性」

受動的なドクサ経験によって単なる信憑として与えられたものを、当のものとして固定し、それに注意を向けたり、その特性を規定したりする「能動的」な知覚経験の内に、フッサールは「判断」の範例的な構造を見いだす。受動的なドクサにおいては「自我の背景」*Ichhintergrund* の位置から自我を触発していた対象は、こうした能動的な知覚においては「自我

の対立物」Ichgegenüber の位置へと移行している。自我は今や対象へと向き直り、「自分の方から」von sich 対象へと向かい、対象をまさに「対一象」Gegen-stand として「対象化」vergegenständlichenden する。

「感性的体験の流れの内に与えられるものを固定化し、それに注意向け、その特性を観察する把握的注視 erfassende Zuwendung は、……最低段階次での認識活動（能動性）Erkenntnisaktivität であり、そこに早くも一つの判断を認めることができる。……存在者に前述定的ではあっても、対象化的に注目する場合はどんな場合でも、既に最広義の判断が成立していなければならない。……この意味での判断とは、対象化する自我作用 Ichakt の全体である。」(EU. p. 62)

フッサールにとって知覚判断とは、「意識されたものを能動的に信じること」(EU. p. 64) であり、「根本的な感覚の、受動的原ドクサの能動化 Aktivierung」(EU. p. 67) である。自我は与えられるものを自ら進んで甘受し、受け取る。このように知覚経験において、受動的ドクサの触発によって前もって与えられるものを、自我が対象化の作用を介して自らに受け取ることをフッサールは「受容性」Rezeptivität と呼ぶ。「受容性」は、「受動性」に基礎づけられながら、それを「対象化＝能動化」することによって存立する「能動性の最低次の段階」(EU. p. 83) である。こうした「受動性」と「受容性」との「基礎づけ」の関係は、『経験と判断』において「時間性」の観点からも論じられている。

周知のごとく、「受動的原信憑」において前もって与えられ自我を触発する存在者は、しばしば「刺激」Reiz と呼ばれたり、「純粋に受動的な」感覚と呼ばれたりしてはいるものの、それは即自的な実在などではなく、時間性によって受動的に構成された所産であり、自我の能動性それ自身も時間内に存する、時間的に構成された作用である。時間性は、受動的所与をも、又能動的な自我作用の所与をも含めた現象的所与の一切を支配する

根源的な法則性であり、「受動的・原信憑」を流れる時間と「能動的把握」を流れる時間との間には基礎づけの関係が存立している。

例えば「鳴り響く同一音に注意を向けて聴く」といった場合、こうした「能動性の最低次の段階」たる端的な把握に先立って、音はその都度の現時点を越えて過去と未来の二重の地平を伴って鳴り響く持続的な統一音として、時間性によって前もって受動的に構成されている。これを能動的（受容的）に把握する場合、把握自身も現時点を越えて鳴り響く「この音」という持続的統一体へと向かう。「持続する音」の把握が持続するのは、音が持続する限りであり、把握の持続は音の持続に基礎づけられている。従って把握が持続し、把握が過ぎ去った音を「いまだ把持していること」*Noch-im-Griff-behalten* と、音そのものが「過去把持」*Retention* によって持続していることは区別されなければならない。「いまだ把持していること」が自我の能動的（受容的）な把握作用であるのに対して、「過去把持」は自我作用の一切介入しない純粋に受動的な把持である。換言すれば「いまだ把持していること」は、能動性以前の、作用なき純粋な受動性ではなく、「本来的に対象化する受動性 *eigentlich vergegenständlichende Passivität*」である。それは「作用の基礎をなすものではなく、作用そのものであり、能動性における一種の受動性 *ein Art Passivität in der Aktivität*」(EU. p.119) である。

第3章 二つの志向性

以上の概略からも明らかなように、『経験と判断』においてフッサールは、「判断」を「対象化」や「能動性」と同義の概念として論じている。これらの構造が「ヒュレー」と「モルフェー」とをその実的契機とする、いわゆる「作用の志向性」の構造と重なり合うものであることはいうまでもないだろう。ヒュレー的内容を能動的に形式化し、意味付与的に生気づ

けすること、それが「判断」という対象化の作用なのである。そしてヒュレー的内容そのものは、もはや「作用の志向性」によって与えられない以上、作用に先だって前もって与えられなければならない。それが「時間性」によるヒュレーの「先構成」であり、『経験と判断』が「受動性」と呼んだものであった。

ところでメルロ＝ポンティは、『知覚の現象学』の或る脚注の中で、次のように語っている。

「例えばフッサールも長い間、意識あるいは意味付与を、把握 *Auffassung* — 内容 *Inhalt* の図式によって、しかも生気づける把握 *beseehlende Auffassung* として定義付けてきた。しかし『時間講義』以来、この機能はより深い別の機能 *opération* を前提しており、このより深い機能によってこそ、彼は決定的な一步を踏みだしたのである。「すべての構成が把握内容 *Auffassungsinhalt* — 把握 *Auffassung* の図式によって行われているわけではない」と、『内的時間意識の現象学への講義』5頁、注1」(PP. p. 178, note 1)

メルロ＝ポンティは、『時間講義』以降のいわゆる後期フッサール現象学と共に、「把握 — 内容」の図式によって定義された「作用の志向性」のいわば下に、その志向性が前提とする、内容自身を把握のために準備している「より深い別の機能」を認めたのであり、それが『知覚の現象学』の説く「知覚」の志向性、即ち「機能している志向性」*intentionnalité opérante* である —— こうした見解がおそらくは、上記の註釈に対する一般的で常識的な解釈であろうし、実際『知覚の現象学』の中にはこうした解釈を促す記述を見いだすことも少なくはない。しかしながら、先述した『経験と判断』の記述を『知覚の現象学』の記述と比較対照する時、こうした解釈をそのまま受け取るには、幾つかの問題点が浮かび上がって来るのである。

まず第一に、二つのディスクールが語る「知覚」概念にはずれがある、という点である。『経験と判断』においては先述したように、前述定的な知覚経験の内には、「受動的・原信憑」と、それに基礎づけられた「能動的（受容的）把握」という、はっきり区別された経験の二つの層がある。前者は作用なき「受動性」であり、後者は最低次の対象化作用たる「受容性」であって、前者が後者なくしても存立する自立した構造であるのに対し、後者は前者によって一方的に基礎づけられていた。それに対して『知覚の現象学』にあつては、こうした「受動性」と「受容性」の区別は知覚経験の中にはないし、従つて「過去把持」と「いまだ把持していること」の区別もない。³⁾ 区別は専ら、前述定的な「知覚」と述定的な「判断」との間に設けられるのであつて、しかもその区別は、非一対象化的な「機能している志向性」と対象化的な「作用の志向性」との区別に重なりあっているのである。

第二に、ここからして当然、両者の語る「判断」概念にもずれがある。『経験と判断』においては、「判断」は既に前述定的な知覚経験において「受容性」として見いだされたのに対し、『知覚の現象学』にあつては、「判断」の名称は専ら、いわゆる「主知主義」の説く形式的で述定的な思惟作用に与えられる。一方、「判断」に先立つ知覚経験全体は、『経験と判断』にならつて「根源的信憑」 *doxa originaire* (PP. p. 50) として語られるが、この「信憑」という表現は、認識活動一般に対立するというよりも、むしろいわゆる「客観的思考」の説く「客観的認識」に鋭く対立して使用されているのである。

第三に、さらに問題を複雑にさせていることには、『知覚の現象学』の説く「基礎づけ」概念は、『経験と判断』の説くそれとずれているのである。『経験と判断』においてフッサールは、「形式—内容」の図式によって規定された「作用の志向性」を基礎づけるべく、その内容を前もって与え

るものとして作用なき志向性へと廻行した。それに対して『知覚の現象学』においては、そもそも作用なき「機能している志向性」こそが本源的な志向性なのであり、はじめから「形式—内容」の枠組みを逃れている。

『知覚の現象学』は、「機能している志向性」を「作用の志向性」によって「形式」化され、生気づけられるべき「内容」を準備するものとして説いたというよりむしろ、フッサール現象学の分析の一切が前提しているこうした「形式—内容」という枠組み自体を、根源的な知覚経験にくらべて二次的で派生的なものとして提示しようと試みているのである。

こうした志向は、『知覚の現象学』が「基礎づけ」の関係を、「形式と内容の弁証法」(cf. PP. p. 148)として語る時、あるいは E. カッシーラーの「象徴的プレグナンツ」という概念を引いて、「素材と形式の絶対的同時性」(cf. *ibid.*)を語る時、はっきり目指されていたものである。そしてこうした志向をうながしたモチーフは、既に30年代に書かれていた、サルトルの『想像力』に対するメルロ＝ポンティの書評からも窺い知ることができる。

「同様に我々は、サルトルがイマージュにおける素材と形式との区別に關しても、それがあゝ種々の心理学者達のもとで見られる場合には厳しい判定を下しておきながら、フッサールのヒュレーとモルフェーの区別には余りに速やかに同意してしまっているのに気づく。——〔ヒュレーとモルフェーという〕この区別こそフッサールの学説の中で、ドイツその地でも異議を唱えられ、また実際最大の難点を成している諸点の内の一つなのである。⁴⁾」

メルロ＝ポンティのフッサールからの離反は、すでにフッサールに対する本格的な研究の当初から始まっていたのであり、その離反をうながしたもののこそ、当時メルロ＝ポンティが精力的に研究していたいわゆる「ゲシュタルト心理学」の知見であった。⁵⁾

周知のようにゲシュタルト心理学は、客観的な刺激と要素的な感覚との一対一対応を説くいわゆる「恒常性仮説」を批判し、知覚の分割しえない最も単純な所与が、「地と図」という「ゲシュタルト」であることを説く。判明な「図」が「地」の上に浮かび上がって見えたり、「地」が「図」の下まで続いていたたり、「地」にも隣接している「輪郭」が専ら「図」にのみ所属する、といったゲシュタルトの持つ意味や形式は、その感性的な素材から切りはなすことはできない。感性的所与と不可分なこれらの意味は、経験的心理学の説く「印象」やその「連合」によっても、また主知主義的心理学的説く「判断作用」によっても説明しえないのである。

『知覚の現象学』はその序論「古典的偏見と現象への還帰」において、こうしたゲシュタルト心理学の知見を用いて根源的な知覚経験へ還帰せんとしている。ここで「古典的偏見」として語られているものは、単に知覚を客観的世界の要素的な素材で構築せんとする、「内容」本位の公準たる経験論的心理学や、「内容」で足らないものを「判断作用」で補完せんとする主知主義的心理学的ばかりではない。暗々裡であるにしても、ここではフッサール現象学の一切の分析がはまりこんでいる「形式—内容」という古典的な枠組みの乗り越えが、さらにはこうした志向に基づく『経験と判断』⁶⁾の捉え直しが企てられてもいるのである。

先に見たように『経験と判断』は、知覚経験において存在者が存在者として明証的に与えられるとは、存在者が世界という存在者の総体を背景としてその上に「浮かび上がること」*sich abheben* であることを「受動的原信憑」として語っていた。これは『知覚の現象学』が、「地の上の図」を知覚経験の最も基本的な構造として捉える志向と通底している。もっとも『経験と判断』にとっては、かかる受動的なドクサ経験に知覚経験は尽きるものではなく、さらにそれに注意を向ける能動的で対象化的な知覚経験も存する。これに対して『知覚の現象学』は、「注意」を対象化として

ではなく、以前は未決定だった地の上に新たな図を切りとることとして、新たな「形態化」*Gestaltung* として捉え直している。

「注意をするとは、単に先在している所与により多くの照明を与えるということではない。それはこの所与を図として浮かび上がらせることによって、その中に一つの新しい分節化を実現することだ。その所与は、〔以前は〕地平として前もって作られていたにすぎなかったが、〔今や〕世界全体の中で、新たな領域を真に構成するのだ。」(PP. p. 38)

未決定のものを図化し、旧い布置を新たな布置へと裁ち直すことによって自らに新たな分節を与える運動、そのつど自分自身の歴史を新たな意味の統一の中に組み入れてゆく意識の目的論的構造、こうしたものこそいわゆる「思惟」と呼ばれているものなのである。

「意識の本質とは、自らに一つの世界、或いは幾つかの世界を与えること、つまり、自分自身の眼前に *devant* 自らの固有の思惟を事物のように *comme des choses* 存在せしめることである。」(PP. p. 151—2)

第4章 存在論的捉え直し

以上のように『知覚の現象学』は、「ゲシュタルト」概念を用いてフッサール現象学を捉え直し、その分析を「形式—内容」とか「能動—受動」といった枠組みから、更にはその枠組みが前提する意識の「作用性格」から解き放つことを試みていた。知覚の志向性は、受動的に与えられた内容の能動的な形式化ではない、というわけである。なるほど、「客観的＝即自的世界」は「恒常性仮説」の批判を通じて「括弧に入れ」られ、形式を欠いた純粋な素材はもはや想定しえない。というのも知覚経験の最も単純な所与でさえ、既に意味と形式を孕んでいるのだから。しかもこの意味と形式は主体が一方的に付与するものではなく、世界の側から促され、動機づけられているのである。世界は志向性によって「構成＝意味付与」され

るが、その志向を促すのは世界なのだ。『知覚の現象学』が説くこうした知覚意識と知覚世界との「受動的総合」*synthèse passive* には、しかしながら、意味の生成に関して「悪しき両義性」を指摘しうるのではないか。知覚を即自的で第三者的な過程とみなす「経験論」に対しては知覚による「構成＝意味付与」を説き、他方、知覚を能動的な意味付与とみなす「主知主義」に対しては、構成に先だって意味が既に世界に与えられていることを説くという、『知覚の現象学』が「構成」に対してとる両義的な態度のあいまいさは、単に「構成」概念を二義的に使いわけることによって解消されるものではない。問題は受動的な構成であれ、能動的な構成であれ、構成の所産である意味世界が構成に先だって、当の構成を動機づけるものとして想定されざるをえないということなのである。「構成されるもの」が「構成」自身に先立つことは背理ではあるまいか。

後年メルロ＝ポンティはこうした問題を「意識の哲学の困難」として次のように定式化することになる。

「意識の前には、意識によって構成された諸対象しか存しない。たとえばそれらの対象の内のあるものは、＜決して完全には＞構成されることがないということを認めたとしても、やはりそれら諸対象はその都度意識の作用や能力の正確な反映であり、それら諸対象の内には意識をして他の展望へ向けて再び投げ返すものは何もないのであり、意識と対象との交換もなければ、運動もないのである。」(RC. p. 59)

『知覚の現象学』は、フッサールの説く「志向性」概念を「ゲシュタルト」概念を用いて、「形式－内容」の枠組みから解放することを企てた。しかし志向性の概念が前提している意識と対象との区別、「ノエンス－ノエマ」の区別自身はそのまま引き継いでいる。ゲシュタルトとは、知覚意識によって意味付与的に構成されるノエマである。そしてこうした構図に立つ限り、知覚意識とゲシュタルトとの間に相互的な運動はありえない。

知覚意識は一方的に意味付与する能動的な構成意識となり、他方知覚は無から存在を産み出す「創造」ではない以上、知覚によって構成されるべき無意味な素材が暗々裡に要請される。こうして再び「形態化」は、「形式—内容」の枠組みを持つ「作用の志向性」となってしまうのである。

晩年のメルロ＝ポンティのいわゆる「存在論」への展開とは、『知覚の現象学』自身が陥っていた意識の哲学から「志向性」概念を解き放し、意識と対象とを架橋する「作用の志向性」とは異なる「存在の内なる志向性」として捉え直すことであった。

『知覚の現象学』の諸成果を存在論的解明にもたらす必要がある。……この最初の記述の後に残る問題は、私が＜意識＞の哲学を部分的に保存したことから生じる。」(VI. p. 237)

「フッサールの全ての分析は、意識の哲学が彼に課した作用 *actes* という枠組みによって制約されている。存在の内なる志向性である、機能している潜在的な志向性を捉え直し、発展させるべきである。それは、＜現象学＞、即ち諸射映を通じて、しかも一つの作用 *un acte* つまり諸々の体験の内の一つの体験 *un Erlebnis* である根源的贈与 *donation originaire* に由来するものとして、無ではない一切のものをば意識に現前させるべく従わせる存在論とは相入れない。」(VI. p. 298)

知覚するとはもはや、知覚意識が自己の前に知覚世界を「投—企」*pro-jet* すること、知覚意識による知覚世界の形態化ではない。「機能している志向性」は意識と世界とを架橋するものではなく、世界そのものの「開け」であり、差異化し形態化する世界の生成そのものである。

「～についての知覚 *perception de*……即ちゲシュタルトは、遠心的な意味付与、本質の付与、表—象すること *vor-stellen* ではない。そこでは、感覚 *Empfindung* と感覚されるもの *Empfundenes* とを区別しえない。ゲシュタルトは開け *ouverture* なのだ。」(VI. p. 235)

「従って形態化とは、……(動詞的な) Wesen、現成する ester という機能、放射をともなった或るものの出現である。」(VI. p. 260)

「領野を志向の糸で構成しようと試みる志向的分析は、これらの糸がひとつの織物の諸発現や諸理念化であること、その織物の諸差異化 *différenciations* であることを知らない。」(VI. p. 284)

「存在とは、＜意識の諸様態＞が存在の諸構造化として記入されているところの、……そして存在の諸構造化が意識の諸様態であるところの＜場＞である。」(VI. p. 307)

メルロ＝ポンティの最晩年の、未完に終わった著作『見えるものと見えないもの』の「研究ノート」に散りばめられたこれらの引用が物語るものは、志向性を存在という織物に織り込もうとするメルロ＝ポンティの執拗な志向であり、フッサール現象学という「意識の哲学」に対する徹底化された批判である。しかしこうした「存在論的捉え直し」とは、フッサールが『経験と判断』において、「作用なき」志向性や「受動性」或いは「先所与性」という概念によって語らんとしていたものの捉え直しでもある。

『知覚の現象学』が「受動性」と「受容性」との区別を廃止することによって既に解決したとみなしていた問題が、ここで再び「存在論的」視点から問⁷⁾い直されてもいるのである。

メルロ＝ポンティのフッサールからの離反は、フッサールへの回帰でもある。そしてこうした二つの現象学の間の、両者を隔てると同時に両者を近づける奇妙な⁷⁾ずれを再構成すること、それこそ私達が目指したものなのである。

注

- 1) メルロ＝ポンティの著作並びにフッサールの著作からの引用は、以下の略号を使用して本文中に組み入れた。

PP. M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, (Paris, Galli-

mard,) 1945.

VI. M. Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, (Paris, Gallimard,) 1964.

RC. M. Merleau-Ponty, *Résumés de cours*, (Paris, Gallimard,) 1968.

EU. E. Husserl, *Erfahrung und Urteil*, (Felix Meiner, Hamburg,) 1972.

- 2) 「我々は作用の、ないし定立的志向性の底に、その可能性の制約として、全ての定立や全ての判断に先立って既に働いている、機能している志向性、言い換えれば《感性界のロゴス》……を見いだした」(PP. p.490)。
- 3) 実際『知覚の現象学』は、「過去持把」を「いまだ把持していること」Noch-im-Griff-behalten と区別せずに用いている。(cf. PP. p.476)
- 4) le *Journal de psychologie normal et pathologique*, 1936, No. 9-10, nov.-déc., pp. 756-761. に1936年、掲載された。
cf. T.F. Geraets, *Vers une nouvelle philosophie transcendante. La genèse de la philosophie de Merleau-Ponty jusqu'à la phénoménologie de la perception*, Martinus Nijhoff, 1971, p. 28.
- 5) 『知覚の現象学』(1945年)に先立つ、メルロ＝ポンティの思想形成の過程に関しては、上記のジェラーツの著作が詳細に論じている。それによればメルロ＝ポンティがゲシュタルト心理学の研究を体系的に始めるのは、1931年10月の兵役後であるのに対して、フッサールの哲学の影響は1933年までは殆ど見いだされない。(cf. T.F. Geraets, Op. cit., pp.7-8)
- 6) 『知覚の現象学』の中には、『経験と判断』からの引用が、しかもかなり屈折した短い引用が四箇所にわたって見受けられるが、その内の三箇所が、序論の第三章「＜注意＞及び＜判断＞なるもの」に集中している。
また、『知覚の現象学』が「ゲシュタルト」概念を用いて、フッサールの「古典的」な志向性の概念の批判を企てていたことは、次の記述からも窺えよう。

(1)

「古典的な考え方は世界についての経験を、構成意識の純粋な作用として扱うのだが、それが成功するのは、意識を絶対的な非一存在として定義し、それと相関的に諸内容を、不透明な存在である＜ヒューレの層＞の中へ押し込んでしまう、その限りである。今や我々は、知覚のゲシュタルトというそれと対称的な概念や、特に空間の概念を検討することによって、この新たな志向性にもっと直接に接近しなければならない。」(PP. p.281)

* 原注(1) 「我々がこれによって理解しているのは、P. ラシエーズ＝レイ『カント的観念論』のようなカント学徒の考え方、もしくはその哲学の第二期におけるフッサール(『イデーン』の時期)の考え方である。」(ibid.)

- 7) メルロ＝ポンティは、「意識の哲学の困難」を説いた、コレージュ・ドゥ・フランスの『構義要録』のなかで、再び「受動性」の問題や、一切の構成に

さきだって存在する「自然」の問題の検討を行っている。さらに最晩年に書かれたフッサール論『哲学者とその影』においてメルロ＝ポンティは、次のように語っている。

「好もうと好むまいと、みずからの計画に背きそしてその本質的な大胆さにふさわしく、フッサールは野生の世界と野生の精神を甦らせた」と。cf. M. Merleau-Ponty, *Signe*, (Paris, Gallimard,) 1968, p. 228.

(大学院後期課程学生)